

白銀の百合

瀧音靜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

みやち様twitter:https://twitter.com/tanya|
vish a38 の描かれたタニヤヴィシヤが尊すぎて工モさの臨界点を超えたので
ファンアートならぬファン小説を書いてしまった。

他の二次創作もちゃんと投稿するので許して……許して……。

目

次

誕生日

タニヤヴィシヤ短編集

馴れ初め	
或る休暇の朝	
日常の前の日常	
溶ける程の寒さ	
羽休め	
苦みの恋しい一時	
望む欲望	
狭間	
お返し	
糖分過多	
溶けろ	
お返し	
溶けろ	
デロンデロン	

64 59 53 48 42 36 31 26 18 13 7 1

馴れ初め

この感情はいつからだろう。

気が付けば、いつでも視線の先には少佐殿が居られて……。

今でも初めてバディを組んでいたときの事は鮮明に思い出すことが出来る。

あの時は足手まといになるまいと、必死に後ろを追いかけ続けたし、それは今でも変わらない。

付き合いが長いせいか。それとも同じ女性であるためか、他のヴァイス中尉などに比べれば、少佐殿から声を掛けていたることが多い気がする。

そんな事を気にし始めてどれだけたつただろう。

「はあ……」

連戦に次ぐ連戦。そして、その全てで勝利を収めてきた少佐率いる我ら航空魔導大隊。

そのささやかな報酬として休暇をいただいたが、同期などは未だ戦場を駆け巡っているようで、特に当てもなくカフェでただ暇とコーヒーを楽しんでいた。

特に意識せず、しかしあつまかと出たため息にまさか反応されるとは思っても見な

かつた。

「ん？ 中尉ではないか。らしくないため息をついてどうした？」

そこには、どうやら軽食を取るためにカフェを利用していると見られるデグレチヤフ少佐が、スナックとコーヒーを持ったままこちらを見ながら立つておられたのだ。「どうも席が空いてないようでな。相席、失礼するぞ？」

「は、ははははひやい！」

「慌てすぎだろう。……さては先ほどのため息は職務に対する不満か？」

突然の登場から突然の申し出に驚いてろれつが回らないまま返事をすると、今度は先ほどそのため息についてのツッコミを入れられてしまった。

「そ、そんな！ 減相もありません!!」

素直に少佐殿の事を考えて。など、口が裂けても言えるはずがない。

力一杯に職務への不満であることだけを否定し、少佐殿の言葉を待つていましたが、少佐殿はどうやらそれ以上の詮索をしようとは思っていないらしく、新聞を広げてコーヒーをすすり始めました。

「貴官はこういった物は読まないのか？」

「ふえ？」

私に向けて声をかけたとき、私は口一杯にクレープを頬張つてる時で、言葉を発した

くても発することが出来ない状態で。

「ああ、いや。何でもない」

と少佐に気を使わせてしまう始末。

急いで口の中のものを咀嚼して嚥下し、すぐさま先ほど私に問い合わせられた事へと返答しました。

「私はあまり……。その……読み始めると直ぐに眠くなってしまいまして」

「あー……。ありありと光景が浮かぶよ」

「少佐殿はお好きなのですか？」

「私が？　まあ、嫌いではない。情報というのはいついかなる時に生きるか分からんからな。たまの休暇くらいしか入れる暇がないのだよ」

そう言つてコーヒーをする少佐殿。

カツプを片手に新聞を広げて満喫なさる少佐殿は、普通に見ればギャップの塊であり、何も知らなければ二度見してしまう人達ばかりでしょう。

けれども、少佐殿の胸に輝く、少佐殿を少佐殿足らしめる銀翼突撃章を見れば、皆一様に納得するでしょう。

この方が、『白銀』である。と。

「そう言えば少佐殿は、戦場でも普段でも変わらないんですね？」

「？　どういう意味だ？」

纏う空気や雰囲気、気迫や緊張感の事を言つたのですが、お氣を悪くされたでしょ
か。

「いえ……その……。じ、常に戦場の心構えというか……」

「そうか？　特に意識はしないが」

少佐殿は、ご自分が常にライフルを携帯している事を忘れておられるのでしょうか？
「だが、そうだな。メリハリも大事だ。戦場の気分を抜く努力でもしてみるか……」
「具体的にはどういった事を？」

「例えばそうだな。貴官の事を…………『ヴァイーシャ』と呼んで見るとかか？」

「げほっ！！　ごほっ！」

唐突な不意打ちに思わず咳き込んで、少佐殿を見ると何やら顔を真つ赤にしておられ
ました。

少佐殿…………破壊力高すぎます。

「すまない。今のは忘れてくれ」

「いえ!!　少佐殿は仰られたではありませんか!!　メリハリは必要です!!!　先ほどの呼

び方を今後も続けましょう!!」

「そ、そうか？　だが…………その…………少し恥ずかし」

「では！ 私と二人の時だけというのは!!」

普段は一言で切り捨てられるような事も、恥ずかしさを誤魔化すためか強く押せば押しきれそうな少佐殿。

「そ、それならば……」

押しきりました。ひよつとすると私の胸中を悟られたかも知れませんが、少佐殿に私の事をヴィーシャと呼んで貰えるのなら構いません。

心の中でガツツポーズをし、達成感を味わっている所に、店の方から声を掛けられました。

「失礼します。ターニヤ・フォン・デグレチャフ少佐というのはこちらの方ですか？」

電話を持つてそう尋ねてきた時点で、話の内容など決まっているようなもの。

少佐殿は電話を受けて、挨拶と相槌を数回。

受話器を置いて、いつも戦場で拝見する凜々しい顔つきになり、

「やれやれ。我々に休息は与えられぬらしい」

電話を持ってきたボーアにチップを渡し、立ち上がった少佐殿は、

「行くぞ。出撃命令だ。……この支払いはしておくから、帰還したらコーヒーを淹れてくれ。私の舌にはヴィーシャの淹れてくれたコーヒーが合うようだ」

そう言つてボカンとする私を置いて先に行つてしまつた。

た。

……両方の頬が朱に染まっているのは、彼女らの頬を撫でた風のみが知つてい

或る休暇の朝

普段ならば億劫で仕方が無い朝。

しかし、今日はその目覚めの瞬間は昨日までのソレとは明らかに一線を画していました。

一人用のベッドの上、同じく一人用の布団の中に居るのは、私と——私の上司に当たるターニヤ・フォン・デグレチャフ少佐殿でした。

狭い布団の中で、まだ少し肌寒い気温に触れぬようとに、私に身を寄せて縮こまりながら寝ているお姿は、普段の少佐からは想像が出来ないほどに年相応で、愛おしいものでした。

私の胸の上、首のほんの下の位置で、安定した寝息を立てていてる小さくも大きなその存在を、思わず少しだけ抱きしめ、少佐の温もりを感じます。

邪魔するなどでも言いたげな小さな呻き声の後、しかしそれでも起きなかつた事で、少佐殿を軽く抱きしめることしばし。

何やら温かいもので満たされたような胸を確認し、私はその温もりに名残惜しくも別れを告げます。

少佐殿を起こさぬようには慎重に気を遣いながら、静かに布団から抜け出して、私はコーヒーを淹れる準備をします。

少佐殿より、

「ヴィーキャラの淹れるコーヒーが一番うまい」

と言つて頂き、こうして毎朝目覚めの一杯を淹れるようになりました。
少しでも少佐を満たしたくて……、愛情を込めたその一杯を少佐殿が起きると同時に提供するようになりました。

大きな物音は少佐殿を起こしてしまう。と、最小限の音、動きのみでいつもと変わらぬ——いえ、いつも通り愛情値最大のコーヒーを淹れていきます。

カツプに注ぎ、湯気と共に香りが立ちこめてくる頃、寝室から物音が聞こえてきます。
「少佐殿、おはようございま——きやつ！」

まずはご挨拶を、と寝室に向かうと、ドアを開けた瞬間に少佐殿に抱きつかれてしましました。

「少佐殿？」

「ん。……目が覚めると居ないという状況に戸惑いを覚えてな。頭ではそんなことは無いと理解しているのだが……」

少佐殿がこれまで身を寄せていたのはいつ頭上に砲弾が降り注ぐか分からない戦地。

夜が明ける度に仲間の数が減つていくような前線であれば、起きたら隣に居たはずの存在が居なくなつていたというのは、当たり前だつたのでしよう。

「私は、ずっと少佐殿のお側に居ます」

「ああ。理解している。が、こうしてヴィーシャの温もりを感じねば納得出来ないのだよ」

私のおへその上辺りにグリグリと頭を擦りつけられ、甘えられます。
見た目の歳相応な振る舞いに、思わず頬が緩んでしまいました。

「さて、満足した。……コーヒーを貰えるかな？」

「はい！」

淹れ立てのコーヒーを手渡しし、少佐殿と同じタイミングでカツプを口へ。
「ふう。……目覚めの一杯はこれに限る」

「少佐殿はお好きですかね。私は嫌いとは言いませんが苦いのはちょっと……」「チョコに異様に反応したり、甘い物に飛びつく様を見ていれば予想できるさ」

子供が背伸びでソレではなく、本当にコーヒーを楽しむといった振る舞いで、香りを、味を、風味を楽しめる少佐殿の表情は、中々に見る事が出来ない様な満足げな表情でした。

「さて、温もりと好物を与えられた随分と機嫌な朝になつたが、何かしたいことはある

かね？」

「はい？」

まるでご褒美とでも言わんばかりの提案に、思わず素で返してしまいました。
「久々の休暇で、折角朝からゆつくり出来るのだ。ヴィーシャのやりたい事を二人でし
ようと思つてな……乗り気では無いか？」

「いえいえいえ、滅相もありません！　ただ、あまりにも幸せすぎてと言うか……」
一瞬だけ落ち込んだ表情を見せた少佐殿に、取り繕わずの本音を言うと――。

「――っ！」

顔を真っ赤にされ、固まる少佐殿。

「どうかなさいましたか？」

「自覚が無いのか!?　……まあ、いい。好きなことを言い給え。ある程度ならば叶えて
やる」

何やら驚かれてしまいましたが、一体何か変なことを口走つてしまつたでしようか?
とはいへ少佐殿と一緒にやりたいこと……。

「あ、そう言えば市場付近に何やら屋台が出来たらしく――
「屋台?」

「はい！　ホテトパンケーキにサワークリームとリングソースをかけた、珍しく甘い物

とのことで少女達の間で話題のこととて……」

「それを食べたい、と？」

少女達に人気であるならば、きっと少佐殿のお口にも合うはずです。何より、コーヒーとも調和するかと。

「はい！……構いませんか？」

「まあ、好きなことを言つて見ろとしたのは私だ。ヴィーサヤがそう望むなら、私としては別に却下するつもりは無いが？」

「では！　本日の朝食に買い食いを希望するであります！」

流し目で私を見られる少佐殿にそう敬礼をして伝えれば、

「ヴィーサヤ……いや、貴官はどうやら私の言いつけを忘れてしまつたらしい」

おもむろに私の方へと歩いてきて、テーブルへコーヒーを置くように促されます。

促されたままカップをテーブルに置き、再度敬礼をして何を言われるかと内心ビクビクしていると――。

「二人の時は、軍に居るときのような振る舞いは禁止したはずだ。……もちろん、親しき仲にも礼儀は必要だが、流石に敬礼まではやり過ぎだな？」

「たまに躊躇ねば忘れるというのなら、こうして定期的に躊躇するが？」

そう私の上で、意地悪な顔で言われた少佐殿は、小さくピンク色で、柔らかい物を私の唇に押しつけるのでありました。

日常の前の日常

何気ない、何の変哲も無い、言うなれば日常の、仕事という括りに入っているであろうその景色も。

いつまでも、どこまでも続く気がすれば気が滅入るもので。
終わりが無い仕事というのは等しく絶望感を与えるもので。

「——今まで続くのでしようか？」

「さあな。気になるならば尋ねてきてみてはどうだ？ 最も、尋ねたところで答えてくれるとは限らんがね」

即応の名に恥じぬ働きを、文字通り遊撃というフットワークの軽さで、様々な戦場を飛び回っていた我ら二〇三魔導大隊は、我らを壊滅せんと物量で波状攻撃を仕掛けてくる連合国を相手に、片手では数えられぬほどの波を押し返しているところでした。

軽口を叩いているように聞こえるかもしませんが、既に私も、ヴァイス中尉やグラント中尉だけで無く、少佐殿でさえもが、残存魔力が尽きかけている状況。

防殻術式もままならず、体のあちこちに銃弾が掠つた際に出来た傷や、軽度の火傷があります。

そんな絶望——そう、絶望以外の何ものでもないこんな状況において、自暴自棄にならずに冷静でいられるのは、私が全幅の信頼を寄せる少佐殿が普段通りに振る舞われているからに他なりません。

「さて、そろそろ仕事を終えて帰路につかねば、我々の残業代だけで国が頭を抱えることになるかもしけん。皆等しく消耗しているだろうが、仕事を切り上げるためにここで今まで以上に奮って貰わねばならん」

あの地獄の再教育を終えた、恐ろしく優秀な大隊の全員に聞こえるように、声を張り上げられる少佐殿。

あの小さな体のどこに、こんな大きな声を出す器官があるというのか……。

それでも、その声を聞いた大隊のメンバーは、私も含めて銃を握る手に力を込めます。なにせ、あの少佐殿が言うのです。

これが最後だ、と。

ならば、私達が着いていかないはずが無いではありませんか。

「まずは我らを包囲しているその包囲網を突破する！　全員可能な限り高度を上げろ！！太陽を背にし、相手の目を眩ませてでも抜けるぞ！」

場を震わすその声に従うように、全員が表情を引き締めて一斉に急上昇を始めます。しかし、やはり残り少ない魔力ではいつも通りの高度など取れるはずもありません。

——が、どうやら元々その事は分かつておられたようで……。

「全く、他の帝国軍には見せられない体たらくだな」

ため息混じりに、最初に失速した少佐殿は、まるで子供がいたずらがバレたときのような、誤魔化すような表情を浮かべます。

「嘆いていても仕方が無い。全員、何としても突破し、振り切り、生き残れ!!」
少佐殿が言うが早いが、即座に急降下を始め生き残るために動き出した人々。
それに続こうと身構えたとき……。

不意に、私に伸ばされた小さな手がありました。

吸い付くように、そして絡みつくように。

その伸びてきた手は、私の手に繋がってきて――。

「本当に最後かもしけん。……ヴィーキャ――着いてこい」

引っ張られ、たぐり寄せられた私の唇に、柔らかなものが押し付けられました。
目を閉じる暇も無く、視界に移るのは灰色の空と小さな敵影だった私の視界が、一瞬
の内に少佐殿に独占されて……。

「あ……」

ゆっくりと離された唇に、名残惜しそうに声を出した私をニヤリと笑つた少佐殿は

……。

「続きは帰り着いてからだ。……死んではならんぞ？」

「はい！ 命に代えても生き残ります!!」

「代えてしまつてはダメだろう。……まあ、いい」

僅かな温もりを私の手に残して、急降下を開始されました。

「大隊各員に伝達。我が大隊の興廃はこの結果次第だ！ 各員、一層奮励、努力せよ!!」
その後を追うように急降下を開始した私の耳に届いたのは、力強く、頼もしい少佐殿のお声で。

「…………どこまでも、着いてきてくれ」

通信を切り、私が後ろにいることを確認して安堵の表情を見せ、私にしか届かぬ声で、
そう言われました。

「もちろんです。……帰り着いたら、コーヒーを淹れますね」

「そうだな。……そうして貰おう」

*

小さな寝息、ほんの少しだけ肌寒い、まだ日が昇りきっていない朝。

傍に寝る、少佐殿の温もりを確認し、ホツとしてから起こさぬように支度をします。

豆は昨日の時点で挽いており、風味が損なわれないようになつかりと保存済み。
進むにつれて香ばしい匂いが部屋に充満していく中、どうやら鼻に届いた様子。

小さな物音がして、少し時間が経てば——、

「おはよう、ヴィーシャ。すまないがいつものようにコーヒーを一杯」

「はい。承知しております。おはようございます。デグレチャフ少佐」

私の英雄、少佐殿が眠い目を擦りながら、そう私に告げてくるのでした。

溶ける程の寒さ

思わず漏れ出たため息は、自分の正直な気持ちなのか。

テーブルに頬杖ついてただ漫然と時間の経過を待つ私を見て、周りは一体何というのだろうか。

らしくない。とでも思われるか？

「はあ……」

再びのため息を吐いたときに、気でも紛らわそとコーヒーでも飲もうと考えて、ため息の原因であるソレに行き着いて、やつぱりため息を漏らす。

「やれやれ、まだたつたの一時間だというのに。——私は、一体いつからこうも孤独に弱くなってしまったのだ?」

仕事で、戦場で信じることが出来るのは自分だけ。

周りは自分の評価を下げる足枷でしかなく、そのため与えた役割は弾よけ。

部下が手柄を立てれば素直に褒めて上に報告し、部下の信頼と上からの信頼の両方とを確立。

成果を上げて安全な後方勤務を目指していたが、果たして最近は本当に弾よけとして

考えているかどうか。

独り言の後に続く、心の中での自問自答。

その自問のテーマを紐解いていけば、つまるところ一人の人間にぶち当たる。
ヴィクトーリヤ・イヴァーノヴァ・セレブリヤコーフ。

二人きりの時はヴィーシャと呼び、大隊の中で唯一プライベートでも繋がっている部下。

何故今そんなことを考えるかと言えば、それは本来は二人きりで今の時間を過ごす予定だつたわけで。

しかし、軍の飲み会に誘われてしまい、断れるはずも無く参加することになつたわけだ。

さらに言えば、自分の方には年齢からそもそも声がかかることすら無いわけで。

会社員時代に感じていた、断れないが行きたくない飲み会の必要性に、まさか転生先でも悩まされることになろうとは。

「そう言えば、こちらの世界での飲み会はどの程度の時間なのだ？」

自分が知つて いる飲み会は、店ごとに違いはあつたが、おおよそ二時間程度のものだつた。

しかし、この世界がそれに準じて いる保証は？

確証は？

最悪朝まで帰つてこず、帰つて来たら来たで、飲み過ぎて二日酔いでまともに動けないなど、時間がもつたいなさ過ぎる。

そんな事が脳裏によぎつたのが三十分前。
そこからいつ戻つてくるか分からぬヴィーナスを待ち続けているが、正直気が気じや無かつた。

であるならばこちらから迎えに行けばいいのだろうが、迎えに行く理由がない。
ましてや迎えに行つたときに、もし飲み会を楽しんでいる様子であればやるせない気持ちになつてしまいそうで、僅かに不安もある。

結果、自問自答という答えの出きつたもので時間を潰すしかなく、気が滅入つていたのだ。

「もう、いいか」

何度目か、何巡目か分からぬ自問自答を終えたターニャは、そう呟いて立ち上がり、上着を羽織る。

そのまま時計をちらりと確認し、早足に外へと向かつた。

——時刻は、ヴィーナスが出かけて二時間ほど経過していた。

*

ワイワイガヤガヤ、時折大きな声が聞こえてきて賑やかだが騒がしい、そんな店内で、

ヴィーシャはようやく最初のお酒に口を付けていた。

周りに勧められ、そのことごとくをのらりくらりと躲していたが、ここに来て理由が尽き、とうとう陥落してしまったのだ。

今までのヴィーシャであれば、目の前の料理にがつつき、舌鼓を打ち、酒で喉を潤して楽しんでいただろうが、今この時のヴィーシャに関しては残念ながらそれほど楽しめていなかつた。

何故かと問われれば、即座にこう答えることだろう。

「少佐殿が居られません」

と。

けれども未成年である少佐殿が呼ばれるることは無く、出かける前に言われた、「せいぜい楽しんでこい」

が皮肉以外の何ものにも聞こえません。

けれど、私が先に抜けて場の空気が悪くなつたらと思うと、迂闊に動けず……。

結果、愛想笑いとソフトドリンクのみで時間まで切り抜けようと決意しましたが、既に私の手にはアルコールが握られていまして……。

申し訳ありません、少佐殿。未熟な私を許して下さい……。

決意はあつさりと瓦解して、ゆっくり静かにアルコールを喉へと迎え入れました。

特有の香りが鼻に届き、滑り落ちる喉元から熱さが伝わってきます。

——はあ。……飲んでしまった。少佐殿に一体何と言ひ訳しよう……。

時間を確認してみると、既に一時間半ほど時間が経っていました。

これだけ居れば、帰つても問題無いですよね？

「ん？ もう帰るのか中尉？ 折角の酒の席だ、もつと飲んでいかないか!?」

「お言葉は嬉しいのですが、これ以上は明日以降に差し支えまして……」

退席しようと立ち上ると、即座に声を掛けられましたが、これ以上私は付き合う気はありません。

そのまましばらく押し問答をしていると……。

「だから、私は将校だと言つていいだろう！ 軍に確認してみろ！」

「し、しかし、未成年の立ち入りは——」

何やらもの凄く聞き慣れた声が。

そちらの方を覗いてみると——少佐殿のお姿が。

「少佐殿！」

「ああ、セレブリヤコーフ中尉……。探したぞ。貴官に話がある。帰るぞ」

「た、直ちに！」

「と言うわけだ、中尉を借りてくぞ。……あまりハメを外しすぎない程度にしろよ？」

私に気が付いた少尉殿は、どうやら私を探していたらしく私を呼びました。

店員も他の大隊各員もぽかんとする中、忠告とも取れる言葉を店に残っている皆に伝え、少佐殿は私の手を引いて歩き出しました。

*
*

「全くあの店員は。私が未成年だからと頑なに店に入れようとしなかつた。……銀翼突撃章を置いてきたのは失敗だつたな」

「あはは……」

「次回からは忘れぬようにせねばな」

普段より気持ち早足で歩かれる少佐殿について歩いているとそんなことを言い出しました。

……あの店員の驚いた顔が脳裏にちらつきます。

「そ、そう言えば話とは？ 本部からの緊急連絡でありますか？」

「？ そんなものは無い」

「はえつ？」

「迎えに来ただけだ」

足を止め、私の方へと振り向いた少佐殿が近づいてきます。

「一体何時だと思っている？ ハメを外すのは構わないが、節度を持つことだ」

「それは……」

「私が直々に迎えに来た意味をよく考へることだ」

見上げられ、凄まれながら言われ、申し訳無い気持ちが溢れます。

「……つ申し訳ありません！ 中々抜け出せずこのような時間に——」

「ん？ 酒の匂いがするな」

「皆さんに勧められて断り切れず……すみません」

「軍務に支障が出ない程度にならば構わんが……しかし、やつらはまだ飲むのか？」

「恐らく……。すみませんでした、少佐殿」

ジト目で睨まれながら言われる少佐殿に対し、謝罪の言葉以外が出ない私。

「全くだ。以後気をつけたまえ——いや、お仕置きをして体に覚えさせた方がいいか？」

「おしおつ!?」

「夜中だぞ？ あまり大きい声を出すんじゃない。——それに、何を想像したのか」

お酒のせいではなく、顔が紅潮していくのが分かります。

ナニを、想像していたなどと……。

「とりあえず帰るぞ。……期待しているようだ、望むお仕置きとやらをしてやらねばな

らんらしい」

いたずらに笑い、私の手を取つて走り出した少佐殿の頬も、僅かに紅潮している気が

しますが、寒いせいだと思うことにしました。
……私と同じ理由だと嬉しいのですが。

羽休め

いつもと変わらない日常で、いつもと変わらないはずの目覚めで、いつもと変わらない朝——の、筈だった。

十分な睡眠を取ったにもかかわらず、体に覚えるのは倦怠感。そんな筈はと思って起き上がるうとすると、視界がぐにやりと歪み、熱っぽさを自覺して布団へと逆戻り。

どうやらどれくらい振りか分からぬ風邪の様で、この体になつて初めての病気ということで、さてどうしようかと思考する。

——が、熱のある頭ではまとまるはずもなく、仕方無く安静にしてるか。と大人しく目を瞑つて寝ようとしたとき。

「あれ？ 少佐殿、先ほど起きられませんでしたか？」

いつものように目覚めのコーヒーを淹れてくれていたヴィーシャが、物音を聞きつけ寝室に様子を見に来たらしい。

「ああ、起きようと思つたんだがな。……どうやら風邪でもひいたらしい」

言葉を発して、自分が鼻声であることを確認し、認識が間違つてなかつたことを理解

する。

日頃から戦場に身を置き、ストレスも、不衛生も、疲労もあるような職場なのだ、今まで体調を崩さなかつたことの方が奇跡と言えるだろう。

「大丈夫なんですか？ 熱は？」

「こうして会話できるくらいには大丈夫だ。今日一日安静にしておけば治るだろうよ」

そう口にしていると、ヴィーシャが近づいてくる気配がした。

何かあるのかと目を開けてみるとそこには――。

額同士を合わせて私の体温を計ろうと顔を近づけてくるヴィーシャの姿がつ！?

いきなりの光景に体は硬直。言葉も発せぬほどの動機と緊張を覚える私を余所に、鼻の頭が触れあいそうな程に顔を近づけ額を合わせ――。

「少し熱っぽいようですね。風邪の時用の食事にしましようか？」
等と尋ねてくる。

その前に額を離すのが先だ。

ただでさえ熱で頭が働いていないというのに、呼吸も体温も伝わってくる今の状況でまともに返答できるはずがないだろうに！

結果、私が取れる行動は、額同士が繋がつてているからこそ伝わる程度の、些細な動きで肯定を知らせる領きをするだけだった。

「では、そちらの準備をして参りますね」

ようやく額を離したかと思えば、そう言つて足早に部屋を出て行くヴィーシャ。全く、もう少し傍に…………。

ダメだ、病気の時というのはどうにも弱気になりすぎる。

如何に普段甘えられない人間が甘える機会だと言つても、私とヴィーシャは上司と部下だ。

そこに上司が部下に甘えるなど、あつてはならないことだ。

結局、そのような悶々とした考えをしながら目を閉じていたせいもあり、しつかりヴィーシャが食事の用意を終えるまでに寝付けなくなつてしまつていた。

*

「チキンステップか……」

「はい。様々な野菜から栄養が出てるので、風邪にはピッタリです。食べられますか？」

「僅かながら食欲はある。いただくよ」

鼻腔をくすぐる匂いは、どうやら私の胃に作用したらしい。

食事をするために上体を起こそうとして、ごく自然に、私の体の下にヴィーシャの腕が差し込まれる。

そのままゆっくりと上体を起こすのを手伝つてもらい、さらには背中に手を当てた状態でもう一本の腕を膝の下へと潜り込ませ、そのままベッドの縁まで私を寄せて、背を預けるし背を取らせてくれた。

「熱いかもせんので確かめながら——」

言われるよりも早くにスプーンでスープを掬い、小さく一口。

口の中にゆっくりと広がる優しい旨味を噛み締め、ゆっくりゆっくり、速くない速度で多くない量を味わつて、ヴィーシャへと感謝の言葉を向ける。

「ありがとう」

「いえ、普段から少佐殿にはお世話になつてているのですから、これくらいはさせて下さい。……他に、何か私に出来ることはありますか？」

喉元まで上がってきた、傍に居ろ。という言葉を何とか飲み込み、フイとそっぽを向いて、真っ当なことを言つてやつた。

「では、薬を」

「了解しました！ 他に何かございましたら、傍に付いておりますので何なりと申しつけ下さい」

そう言つて、どうやら風邪薬を買いに向かつたらしいヴィーシャが部屋から出るのを見送りつつ、私は盛大に緩んだこの頬を、絶対に誰にも見せないように体を滑らせ布団

を被つた。

——ほうら見ろ。私が言わずともヴィーシャは最初から私の傍に居る氣だったではないか。

全く、よく出来た副官には困つたものだな……。

苦みの恋しい一時

「来ておいて言うのも何だが……本当にこんな場所で良かったのか？」

「はい！ 是非とも少佐殿とこのような場所に来たいなど、常々思っていました」

戦場から戦場を飛び交う騒乱の中を日常と決め、それこそ息つく間もなく活躍していった大隊に、慰労のためにと突如言い渡された休暇。

あまりにも突然すぎてやることが思いつかないため、何かしたいことや行きたい場所などはあるか？ とヴィーザヤに尋ねてみたところ、

「では、ここから少しだけ距離がありますが、湖に行きたいであります！」

と返つて来た。

ならば、と恋人よろしく手を繋いで二人でフライトし、目的の場所まで来てみると。

そこは我々の日常とはほど遠い静寂で、耳に届くのは銃声や悲鳴、断末魔といった人工的な音ではなく、風に揺れる葉や波のさざめきや鳥のさえずりという自然の音。

心が洗われる、という表現が合うかは分からぬが、一種の清々しさを覚えるこの感情は、確かに来て良かつたと思えるものだつた。

「素敵な場所ですね」

「そうだな。……まあ貴官と一緒にならば大抵の場所は素敵な場所へと昇華するが——」

浮かれてか、それとも油断か。

自然にスルリと私の口から滑り出たその言葉は失言となり得るだろうか？
発言して時間にすれば数十秒。しかし、その無言が痛く、どのような表情なのかと恐る恐る顔を見ると。

「……／＼＼＼＼＼

裾を握りしめて赤面するヴィーサの顔が確認できてしまい、見ているこつちも思わず赤面してしまう。

一つ一つの動作が私に対する直撃弾なのだが、果たして彼女は気が付いているのだろうか。

「しょ、少佐殿は……ズルいです」

僅かに瞳を潤ませながら言うその姿こそがズルいと思うが、今の私は顔がにやけていると実感している。

故に、顔をこれ以上あげることが出来ない。……あげればヴィーサに見られてしまうだろうし、それに対しても反応したヴィーサに我慢できそうにない。

静かな湖畔、町からも、戦地からも少しだけ距離がある為に許された、たつた二人の——二人だけの空間。

そんな場所を二人占めにしておいて、なおも望むか。

握っていた手は次第に絡み、さほど離れていなかつた二人の距離が、どちらからでも無く縮まつていく。

夕日に映し出された伸びた影は、二つが——一つに。……そしてまた、二つに。

「今のは……ご褒美でありますようか？」

「そうだな——激励、というのはどうだ？　ご褒美はこれから活躍次第、というのは」「こ、これからでありますか//／＼」

「おや、何を想像したのか。顔が真っ赤だぞ、ヴィーキー」

「少佐殿こそ——」

全く、何を言つてゐるのか。私はただ夕日に照らされてゐるだけだろう？

私は貴官とは違うのだよ。

「……少佐殿——」

等と心の中で言い訳をしてゐると、不意に彼女が顔を首元に近づけてきて……。ゆつくりと柔らかいものが押し付けられた。

「お返し、です」

いたずらっぽく笑うヴィーキーは夕日に照らされ、眩しい笑顔を向けてきて……。当事者だというのに、この甘つたるい空気に思わずむせてしまいそうになつた。

先ほどまでより気温も、体温も高くなつた気がするし、もうこの場の空氣には耐えられない。

早急に立ち去るとしよう。

「そろそろ戻るか。直に寒くなりそうだ」

「帰り着く頃には冷えそうですね。……帰つたらコーヒーを淹れましょか?」

「是非そうしてくれ。甘いものを摂取し過ぎたようだ。貴官のコーヒーが恋しいよ」

「プラツクコーヒーでも飲めば、多少は落ち着くだろうか。」

あまり変わらない気もするが……。

「ヴィーシャと……呼んで下さらないのですね……」

「誰かに聞かれでもしたらどうする。二人きりになつたらちゃんと——」「ちゃんと?」

拗ねた表情をするヴィーシャに釣られ、思わずそんなことを口走つてしまつたが、果たして私は約束していただろうか。

二人きりの時はヴィーシャと呼ぶ、という約束を。

……記憶には無い。ということはたつた今、このセレブリヤコーフ中尉に言質を取ら
れてしまつた訳で。

「ああ、もう! 呼ぶよ! 呼ぶとも!」

「少佐殿!!」

やけくそ氣味に約束すれば、飛行中だというのに私に抱きついてくるヴィーシャ。

全く、この場面をもし万が一見られてでもいたら、目を覆うようなお仕置きをせねばならん。

望む欲望

額に少しひんやりとした感触が伝わって、目が覚める。

目を開く寸前の感覚から察するに、どうやら体調は快復したようだ。

気怠さが消え、さっぱりした感覚にありがたさを感じつつ、ゆっくりと瞳を開く。

「おはよう、ヴィーサイ」

「あ、おはようございます。……起こしてしまいましたか？」

「いや、起こされたというよりは、目覚めへ導かれた、とでも言うべきだろうな」

現に不快感など無く、それどころか目が覚めたことに感謝しているくらいだ。

私の顔を心配そうにのぞき込みながら、額に手を当てているヴィーサイを見ることが出来たのだから。

「お身体の具合はいかがですか？」

「お陰で良好になつたようだ。……コーヒーを貰えるか？」

「はい！ すぐにお持ちしますね!!」

いつもの朝のお供をねだれば、敬礼して部屋から出て行くヴィーサイを横目で見つ
つ、ひつそりとため息を——吐息を吐く。

全く、気が付いていないとも思つてゐるのか……。

熱で臍気ながらも、私の記憶には、寝付くまで頭とお腹を撫で、額に乗せた濡れタオルをこまめに替えてくれていたヴィーサの姿が鮮明に焼き付いてゐると言うのに。

額に当たられた体温もだが、何より頭全体に残る温かみを私が理解しないと？

……どうやらかなり気を遣わせてしまつたらしい。

前回はお互ひの為のようになつてしまつたが、今度ばかりはヴィーサのしたいことをしてやろう。

そう決心したとき、脳が覚醒する匂いを連れて、ヴィーサが部屋に入つてきた。

「お待たせしました！」

「そこまで待つては——いや、心待ちにしていたな」

カップを受け取り一口含み……ああ、素晴らしいかなコーヒー。

二人きりで静かな朝にいただくコーヒーのなんたる美味さか。

たつた風邪で寝込んでいる間飲めないだけで、こうも愛おしく感じるものか。

「本日はいかがなさいますか？　まだ快復直後で、出来ることは限られると思ひますが

……

「そうだな。——ところで、私が寝込んでいる間、貴官はとてもよく働いてくれた」

「はあ……」

私の言いたいことが伝わらないためか生返事を返すヴィーシャ。

皆まで言わせる気か……。

「そこで、働きに見合った褒美を与えようと思うのだが、何かやりたいことはあるかね？」

「はへ？　——え？」

「だから、貴官の好きなことをさせてやるぞ、と言っているのだ」

どうにも理解出来ないらしく、直球そのものを結局口にさせられた。

よもや狙つてやつているわけではあるまいな？

「で、では！　僭越ながら——」

* *

相手の膝の上に身を委ね、ゆっくりゆっくり、優しく侵入してくるソレを受け入れる。

「急に動かないで下さいね？　危ないですから……」

「重々自覚して……んつ！　いるが、どうにも体が勝手に……ひやう！　反応してしまふな……」

「ただでさえ少佐のは小さいですから、私も慎重になりますよ……」

私の穴に、固く長いものを入れていくヴィーシャによつて、嫌が応にも体が反応してしまう。

……とはいって、嫌でも無ければ彼女の望むことであり、しかも快感までも与えてきているのだからたちが悪い。

声は漏れるし体は跳ねる。例えそれが、仕方の無いことだとしても、正直危ないことであるには変わらない。

「しかし、こんなことで……ひやつ！ よかつたのか？ ……その、楽しくないだろう？」

「いいえ！ とても楽しいです。こうして——少佐殿に耳かき出来るというのは」

そう、ヴィーシャの願いは私に耳かきしたい。である。

……もちろん膝枕で。

そんな事ならば、と受け入れてみたが、どうにも刺激が強すぎる。

もちろん、耳をかき回される事もだが、顔からダイレクトで彼女の体温を感じてしまえるのだ、膝枕というやつは。

そして横目でヴィーシャを見上げようとすれば、彼女の双璧が視界を塞ぎ、あまつさえ穴の奥をほじくろうと前屈みにでもなろうものなら、私の後頭部に双丘が当たり、柔らかく形を変えるのだ。

——生殺しもいいところである。

そしてさらに言えば、耳かきをするために、そして奥を見やすいようにと穴の縁に添

えられた彼女の指は、手は。

時折耳たぶや耳の軟骨を刺激し、さながら耳への愛撫かとすら錯覚する。

私の体が跳ねる理由がおわかりいただけただろうか？

反応するなどいう方が無理な話なのだ。

「その……まだ終わらんのか？」

壁という壁を搔かれ、もう耳の中は掃除尽くされているはずだが、一向に手が止まる
気配が無い。

「あと少し……こっだけ」

彼女の口から漏れ出了た吐息は、優しく私の耳を刺激して。

直後、それまで耳の中を蠢いていた耳かきが、唐突に耳の表面。
形状的に溝が出来てしまふ耳の部分を優しく引っ搔き始めたのだ。

「—————！」

声を出さなかつたことを、褒めて貰いたい。

不意を突かれ、けれども動けず、私に許されたのは足をピンと力一杯伸ばすことのみ。

あまつさえその直後、

「ふう」

と耳に息を吹きかけられて私はもはや息も絶え絶え。

「名残惜しくはあります、これで終わりであります」

双丘越しに私をのぞき込むヴィーザの口から、ようやく解放宣言がなされホツとしていると——。

「では、反対の耳もしますので、向きを変えて下さい」

と声を掛けられた。

——この時ばかりは、彼女の笑顔が悪魔の笑みに見えてしまった。

……結局、もう片方の耳掃除を終える頃には、私の息は風邪の時以上に不安定で激しいものになっていたことを追記しておこう。

狭間

明晰夢、という物をご存じだろうか？

夢でありながら、夢だと自覚出来て見ている夢のことです。

自覚しているが故にその夢の中で好きに動き回る事が出来る。
あまりに現実離れしている夢よりは、何故だか身近な日常の夢の方が私の場合は起こ
りやすい。

日頃から戦場という非日常の中にいるからこそ、何気ない日常に違和感を覚えるのか
かもしれない。

「全く、少佐殿つたら——」

そんな事を呟きながら私に向かってスプーンを向け、『あーん』を強要してくるヴィー
シヤ。

夢の始まりはいつも唐突で、突拍子もないものばかりだが、流石にこの光景にはツッ
コミを入れたくなる。

「あーん……。いつも通り、うまい」
が、残念な事にこの時はまだ夢だと自覚しておらず——。

されるがままにあーんをし、入れられるままに頬張つて感想を言う私。

照れた様に頬を染めるヴィーナスの反応は現実のソレと変わるものではなく、それが私に夢だと自覚させるのを遅らせたのだろう。

しかし、不意に視界に映つた涎掛けが私の認識を覚醒させた。

——断固として『赤ちゃんプレイ』の趣味は無いし、なんならこの世界に転生せられたときに経験済みだ。

それをまた体験したいなどと思うはずも無ければ、ヴィーナスが私を赤ちゃんにしてお世話をしたい、等と言いく出すとも思えない。

……言い出さない——と信じたい。

よつて、数瞬の内に夢だと自覚、そして、今のシチュエーションから好きに動けるとなれば——、

「時にヴィーナス、私にこうして世話を焼いていると言うことは、貴官は保護者なのだろう？」

「え？　あ、はい。そうなります……かね？」

「では例えばの話、私が甘えるに当たり『貴官』や『ヴィーナス』と呼ぶのは適切ではないな？」

「は……はあ」

生返事が返つてくるが知つたことではない。夢の中という私だけの空間ならば、好きに動かせて貰うとしよう。

「では……貴官は何と呼ばれたい？ お姉ちゃんや、ママ、あるいは先輩でも、好きなように呼んでやるぞ？」

「なつ……／＼＼＼＼

一体何と呼ばれるのを想像したのか、耳まで真っ赤にし俯くヴィーシャ。

それならば私に向けて『あーん』をした時点で紅潮させて貰いたいものである。呼び方以上に非現実的なことであろうに……。

「ではその……お姉ちゃん、と」

「了解した。では早速——お姉ちゃん、私、コーヒー飲みたいな～」

わざとらしく咳払いをした後に、あのダキアの首都に向けて勧告したときと同じ声色で。

歳相応に幼い声でそうヴィーシャに呼びかけると、彼女の顔が一気に破顔した。

「ああもう！ ターニャちゃん可愛い～！」

口元に光る涎も気にせず、光速で私を抱きしめ、頭を撫で繰り回された。

ああ、流石は私の夢だ。現実ではまず有り得ない呼ばれ方をしたし、現実の彼女はここまで自分に素直ではない。

彼女の豊満な胸に顔が埋もれ、若干息が苦しくなつた辺りで顔を上げ、

「お姉ちゃん……苦しい」

上目遣いでそう囁けば——、

「はうつ！」

思わず卒倒してしまつた。

と同時に景色が光速で流れていく。

どうやらお目覚めの時間のようだ。

彼女に要求したコーヒーが、既に用意されることを現実的に理解し、私の意識は引き上げられていく。

「おはよう」

「——っ!?　お、おはようございます少佐殿」

目を開く前にどうせ近くにいるだろうと挨拶だけを先に行うと、予想よりも近い所から返事が返ってきた。

遅れて目を開き、状況を確認すると——。

目前まで近付いたヴィーサヤの顔があり、しかも唇は気のせいかな艶を持つている。

事後か、それともこれからか。

僅かに残つた唇の感触からすでにされた後であることを自覚し、

(そう言えば夢の中で柔らかいものに包まれて息苦しくなつたな……あれが暗示かつ
!)

妙な考えに行き着いてしまい赤面すると、それをヴィーサヤに目ざとく見つけられてしまふ。

「顔が赤いようですが、また熱ですか?」

純粹に心配してるのであろう彼女の手は、朝から既に働いていおりひんやりと冷たく、今まで布団を被り寝ていた私の首筋に、心地良い温度が当たられた。

「いや、大丈夫だ」

「ならないのですが……」

その手にそつと手を添えて、大丈夫だと口にすれば、安心したのか彼女の手から力が抜け、添えただけのはずの私の手に預けてきた。

こういつた些細な仕草も、大分分かるようにはなつてきた——が。

思い通りに事を運び続ければすぐに調子に乗るのだ。

少しは私が不意打ちでもするべきだろう。

熱が無いかを確認するためのぞき込んだままの彼女、その伸ばした手を引っ張ればどうなるかなど、簡単に想像が出来る。

「ひやつ!」

簡単にバランスを崩し、そして体を支えようと手近なものに縋ろうとするが……。そんなものの、私以外に無い空間で、当然の結果のように私に抱きつく格好になる。そして、そんな彼女が何かを言う前に、何か行動を起こす前に。

ほんの少しだけ首を動かし、首筋に小さな痕を付ける。

——この後、滅茶苦茶イチャイチャした。

糖分過多

「——ん？」

些細な変化……いや、下手をすれば気が付かなかつたかもしれないそれは、しかしハツキリと私は認識した。

ヴィーサイの淹れてくれたコーヒーの些細な変化を、である。

「お口に……合いませんでしたか？」

おずおずと、不安そうに尋ねてくる出来る部下は、私が「不味い」と吐き捨て、飲まないとでも考えたのだろうか？

「いや——うまい。ただ、いつもと違うと思つてな。……焙煎か？ それとも抽出方法か？」

さして変化も起らぬだろうに、角度を変えて液面を眺めてみたり、香りを今一度鼻腔に入れ、楽しんでみたり。

まるでワインでも飲んでいるかのような振る舞いは、しかしソレと変わらないほどの楽しみを私に与えてくれているという証明。

「今日は焙煎の方を変えてみました……」

「なるほど……」

そう聞くと香りがいつもより香ばしい感じがするし、僅かながらに酸味が強い気がしなくもない。

「ふう——ありがたいな」

けれども前述の通り些細な変化であり、また、変化しない部分も存在するわけで。変わらぬ『美味しい』という事実を受け止め、そして——自分のために焙煎を変えてみたりと工夫を凝らしてくれる彼女の存在を思つて、無意識に出た幸せのため息と言葉。

「その……少佐殿？ どういった意味でしようか？」

「出来る部下を持ってて助かる、という意味だ」

わざと部下と口にして、照れ隠しをしてみたが、そもそも褒めていることには変わりない。

けれどもいつも通りのヴィーンヤ呼びでない事が彼女の不安を煽ったか。

「ひよつとして、不要な世話をしたでしようか？」

今にも泣き出しそうな表情で、声を震わせ尋ねられると、真っ先に罪悪感がこみ上げてくる。

「そんなわけがないだろう。そもそも『うまい』と言ったはずだ。私はコーヒーに対して

は絶対に嘘は付かんぞ？」

「で、ですが……」

まだ納得しないか。あまり言うのは恥ずかしくて遠慮したいところなのだが……いや、部下を労うのも上司の務め。その労い方を間違えたのならば自分で責任を取らねばなるまい。

「一度しか言わんからよく聞け。普段のコーヒーも美味しいが今日のコーヒーもうまい。手間暇をかけて淹れてくれたのが分かる以上、その事を感謝しないはずがないだろう？だから……その——、これからもこういったコーヒーを淹れてくれ」

意を決して言い始めた時とは対照的に、恥ずかしさで尻すぼみ的に小さくなつた私の声に、豪雨中に太陽が顔を出したが如く晴れた笑顔になつたヴィーシャは、

「分かりました！ 私はこれからも少佐殿の為にコーヒーを淹れ続けるであります！」
敬礼までして声高らかに宣言した。

……これからも。か。

たつたその五文字に、どれ程の思いを込めているのだろうか。

どちらかの愛想が尽きるまで？ 死により分かたれるまで？ それとも——添い遂げるまで？

期待は、願望は、思ひは、願いは。

この時だけはお互の思考が同じなのだと確信がある。

終わりまで——最後まで、だろう？　ヴィーシャ。

勝手に甘つたるくなつてしまつたその場の空気を中和するため、コーヒーを一口含んでみれば。

彼女が、私のためを思つて淹れた。その事実からか、味が柔らかく、丸くなつてているような氣さえする。

いつも以上に舌で転がし、空気を鼻へと抜けさせて香りを楽しみ、ゆっくりと味わつて飲み下せば……。

「少佐殿——幸せそうですね」

などと笑みを向けられてしまい……。

「幸せそう……か。——似合つてゐるだろう？　大切な存在とかけがえのない時間を共に過ごし、好きな物を楽しんでいる姿は」

口から出てきたのはガムシロップなどでは表現できないほどの甘い言葉。

そもそも彼女は、表情なのか、取り巻く空気なのかを言及していない。

言及していなゝだけでどちらも正解なのではあるが、それにしても先の言葉は自分がうるさいとして恥ずかしくなる。

顔を見られぬようにと背け、コーヒーを口に含むと——、

「少佐殿。……私も——私も、今この瞬間が最高に幸せであります」

なんて言葉が飛んできて、思わず吹き出しそうになつた。

不意打ちも甚だしく、思わずむせてしまつたぞ。

「だ、大丈夫ですか？」

「ゲホッ！　だ……誰のせいだと！」

背中を撫でられる感触も、呼吸音さえ聞こえそうな顔の位置も。
そして、彼女の思いやり、優しさに溢れた私に接する態度も。

全部が全部甘くて、心地良くて、温かくて。

今私の口に合うのは、惜しいがヴィーシャの淹れてくれたコーヒーでは無いようだ。

全く、ヴィーシャといふといふように振り回されている気がするよ。

「少佐殿——んむつ!？」

私がコーヒーよりも優先して求めたのは、柔らかく、甘く……そして温かいものだつた、とだけ伝えておこう。

お返し

「中々に難しいものだ……」

教わった通りに作れたと思い、いざオーブンを開けてみると、そこには残念ながら理想とはほど遠い——綺麗な焦げ目とはお世辞にも言えない焦げが目立つシユトルーデルが。

何を間違つたのかと自問するが、当然答えは出ないわけで。

時間を確認するとあまり余裕もなくなってきた。

何としてもヴィーシャが来るまでに満足いく物を作つておかねば……。

*

「少佐殿のお宅に……ですか？」

「そうだ。風邪を引いたときやハーブを貰つたときなど何かと世話になつてていると思つてな。ささやかながら恩返しでもと考えている……迷惑か？」

「そ、そんなっ!! 迷惑だなんて滅相もありません！ むしろ呼んで頂けるという事実が嬉しそぎて——」

純粹な好意。あるいは喜び。

それを真っ直ぐに振りかざす彼女の笑顔は、私にとつて破壊力抜群。

例えそれが、上司が部下に貸しを作りっぱなしでは顔が立たないのではないか？　と言う考え方から来た提案に対しても、である。

「で、ではあれから作り続いているハーブティーと、何かお茶菓子を用意しよう。……構わないか？」

「はい！　次の休暇日ですね！　心待ちにしておきます!!」

*

などというやりとりをしておきながら、肝心のお茶菓子にこうも失敗するとは。

現世ではもちろん、この世界に来てからも少しは料理をしておくべきだつたと後悔せざるを得ない。

とりあえず後は焼くだけだが……毎度火加減を間違える。——このくらいか？

と、残りは焼き上がりを待つだけになつて少しすると、家のチャイムの音が響き渡る。

「お邪魔します！　少佐殿！」

「いらっしゃい。貴官はいつも元気だな」

扉を開けると、思った通りの元気を振りまく笑顔のヴィーシャがこんにちは。

普段と違うのは軍服か私服かという程度であろう。

——とてつもない破壊力ではあるが。

「少佐殿のお手製のお菓子が食べられると聞いて、昨晩はあまり寝付けませんでした!!」「それは果たしてどうなんだ。部下の健康を阻害するならあまり行うべきでないような気もするが……」

家に上がるよう手招きをし、他愛ない会話をしていると……。

「? 少佐殿? 何やら焦げ臭いような——」

——ツ!?

言われて気付き、脱兎の勢いでオープンへと向かうがもはや手遅れ。
残念ながら最後のシユトルーデルも焦げてしまっていた。

文字通り膝をつき、がっくりどうなだれる私だが、ヴィーシャはというと——。

「私も何度も同じ失敗しましたよ。砂糖が入ると焦げ付きやすいんですね」
私は構わずオープンからシユトルーデルを取り出して……。

「食べましょ、少佐殿。料理は何を思つて作ったかですよ! 私のためにと作つて頂いたのであれば、私は必ず完食しますので!!」

ああ、ヴィーシャよ。今はその優しさが痛い。

「どいうのは冗談で——」

?

「実は、薄い生地を重ねているので焦げているのは表面だけなんです。なので、表面さえ削ぎ落としまえば全く気にならないんですよ」

と言つて近くにあつた包丁を手に取つたヴィーシャは、驚くような速さで焦げている表面だけを削ぎ落としまい……。

「ほら、全然大丈夫でしょう!」

と満面の笑みで手直しされたシユトルーデルを見せつけてくる。

全く、上司の失態を部下に尻拭いさせたのでは、本当に立つ瀬が無いでは無いか。

「感謝するよ。——ありがとう、ヴィーシャ」

耳元で囁き、ハーブティーを準備しに行くと、後ろでヴィーシャが腰碎けになつたりしていたが、特に私は気にしなかつた。

*

「んぐぐ。美味しいです!」

「作つておいてなんだが、意外にイケるな」

包丁で切り分け、ハーブティーと合わせて優雅にティータイム。

シユトルーデルを口に入れたヴィーシャは開口一番に舌鼓を打つてくれた。

「リングとアーモンド、さらにはチヨコレートが絶妙にマッチしてます! 嗜好品のチヨコをコレに使うなんて発想、私にはありませんでした!!」

「はは、貴官のことだ。貰つたその日に食べきつてしまつていそうだな」

「どうして分かられたのですかっ！」

シナモンティーを用意したこともあり、何を入れるか迷つた挙げ句に、そう言えば
ヴィーシャはチョコに目がなかつた事を思い出して軽い気持ちで入れたのだが……。
いや、そもそも現世でもチョコとの組み合わせを多数目にしてきていたのだから、合
わないとは思わなかつたが——。

よもやここまで好評とは……。

「はふう～。シナモンティーも鼻をくすぐる香りがたまりませんね～」

「本当はレモングラスとミントで作りたかったのだが、生憎材料さかなが手に入らなくてな」
美味しそうに食べ、幸せそうにくつろぐヴィーシャの表情を着さかなに——と言うわけでは
ないが、そうなりそうなほどに、気持ちのいいくらいに満足した表情を見せてくれてい
る。

「いいんですよ。相手を思いやり、作った料理は全てご馳走です。私は少佐の手料理の
ご馳走が頂けて大満足ですよ」

カツプを握り、温かい表情でそんなことを言われ、一瞬告白とすら錯覚してしまいそ
うになり首を振る。

「ふふ——」

「何かおかしいか？」

唐突に笑い出した彼女の真意を探るべくした質問は――。

「いえ。どうやら少佐殿も、誰かに料理してみたいという第一歩を踏み出したようなので嬉しく思いまして」

心中で色々と理由を付けてきた今回の件を、たつた一発で崩すものであり。

「本日はお招き頂き、ありがとうございました。今度お返しをしようと思うので、是非私の家にいらしてください！」

この者の、ヴィーサヤの笑顔を見たいが為の料理なのだったと、事実を確信として、私に掲示する物だった。

……もちろん、ヴィーサヤのこの誘いも、私を笑顔にしたいが為の事なのだろう。

――この連鎖は、ちょっとやそつとでは……収まりそうにない。

溶けろ

緊張の時間が果たしてどれだけ続いただろう。

足音は消し、視線からは隠れ、ようやく……ようやくだ。
やつと辿り着けた。

まだ、安堵してはいけないが、それでも、胸を撫で下ろすくらいは許されるだろうか。
条件は全てクリアー。後は、目の前の扉を僅かに開き、その隙間から身体を滑り込ま
せて室内へと入るだけだ。

その後、音を立てずに扉を閉めて、晴れて私がなすべき事は終わる。
頬を汗が伝い、地面へと垂れるその瞬間。

——半歩で扉へ。勢いを殺さず、しかし最低限の幅で扉を開き、スライディング氣味
に部屋へと侵入。

タイミングを見計らつてドアノブから放した手の勢いで、扉は静かに閉まる。
完璧だ。ミッションコンプリート。満場一致で大成功だと褒められるに違いない。
そう確信できる動きを私は成し遂げた。

「…………貴官は突然部屋に入ってきて、何故妙なポーズで天を仰いでおるのだ？」

スライディングで滑り込んだままの格好で両手を握り天へと掲げていると、部屋の主であるデグレチャフ少佐殿から声を掛けられました。

何故？ 何故かと？ それを聞かれになるのですか！？

当然、誰にも見られず少佐殿の部屋へと入ることが出来たからで、これすなわち誰にも邪魔されずの逢瀬が確約された事ともはや同義！

では何故この状況で喜ばないのでしょうか。喜ぶしかないようと思われます。

「中々に難しい難易度のミツションを、無事に完遂出来たと自負したからであります！」

「何がミツションだ。嗜好品を用いて私の部屋にてお茶会をしよう、と言つただけだろうに」

「だけ？！ だけな訳がありません！ 少佐殿と一つ屋根の下でお茶会ですよ！？ これはご褒美もご褒美であります！」

「まあ、落ち着け。貴官がどのような思いでこのお茶会に来たかは知らんが、そんなテンションで最後まで付き合えるとも思えん」

「さ、最後までありますか！！」

「落ち着けと言っているだろうが。全く……」

ため息をつき、額に手を当てた少佐殿は、私の方へと歩み寄られて——。
ちょこんっと、私の膝の上にお座りになりました？

膝から伝わる体温が、柔らかさが！

が

……ほとんど血と硝煙とコーヒーの香りですが……。

それでも、少佐殿の身体から漂うというだけで、何やら特別な香りに感じてしまいま

す

「さて、ヴィーキャ。こうして座つてしまつたが、床という固い場所に座り続けることは本意ではあるまい？ 何も無い部屋ではあるが、流石に寝るためのベッドくらいはある。そこに座り直してはどうだ？」

意地悪そうな顔で見上げ、そんな事を私に告げる少佐殿。

と言う割りに、私の膝の上から一向に退く気配が無い事を加味すると……。

「そ、その……失礼します！」

立ち上がる前に少佐殿の小さな身体を抱き抱え、持ち上げて。

どうやら正解だつたらしく、甘えるように首元へと腕を回してくる少佐殿。そのまま立ち上がり、ベッドへ移動を開始した頃――。

「貴官は優秀だな」

と耳元で囁かれまして。

膝から力が抜け、転けそうになりながらも、私は何とかベッドへと着陸します。当然抱き抱えていた少佐殿も、私の膝の上にしっかりと着地しておられました。

「褒めるとコレだ。私に褒められたくないのかね？」

「めめめ、滅相もありません！　ただ……」

「ただ？」

「囁いていただけるのが幸せすぎて……。身体から勝手に力が抜けてしまうのです……」

変わらずイタズラっぽい笑みを浮かべていた少佐殿でしたが、私がそう言うとすぐに顔を背けてしまわれました。

しかし直後。

「目を閉じろ」

少佐の伸ばした手が私の後頭部を撫で上げ、頭の角度を調整してきて——。

言われるままに目を閉じて、視界に入った最後の光景は少佐殿がこちらを見上げているお姿であり——。

私の唇に、柔らかく、小さいものが押し当てられた時は驚いてしましたが、少佐殿が放してくれません。

軽い困惑で呼吸が苦しくなる頃、ようやく放された唇同士に、光る筋が橋を架けて。互いに熱を帯びた視線で、お互いの事を見つめます。

今度は向かい合い、後頭部では無く頬へと添えられた小さな手に導かれ。再度接吻を行います。

先ほどのキスでは物足りぬ、と。

頬に添えられた手はいつの間にか抱きしめるような形へと持つて行かれており……。比べられぬほど情熱的な交わりへと昇華したその行為を貪ること、果たしてどれ程経つたでしょうか。

お互いが満たされぬ渴きを紛らわす事が出来たと思うまで重ね、その後。

私が入れたコーヒーを片手に、満足そうにチヨコを頬張るデグレチャフ少佐を膝に乗せつつ、私も、デグレチャフ殿から時折『あーん』されるチヨコと共に、幸せを噛み締めるのでありました。

デロンデロン

「は？ ホットチョコレート？」

「はい！ 特別な作り方を教わったので是非とも少佐殿にと……。ダメでしょうか？」
珍しく帝国からの出撃要請がなく。

訓練を流し、装備の手入れを行つて早めの帰宅。

それを部隊員へと連絡すれば、少尉が私の元へと駆け寄つてきた。

内容は先ほどの通り。

確かにチョコは嫌いではないし、ホットチョコレートというのも覚えがある。

ようは、甘みを追加したチョコレートのドリンク。

厳密には違うかもしれないが、そう大幅に違つてはいないはず。

しかし彼女の口から出てきたのは『特別な』などという単語だ。

顔が赤かつたり、少しもじもじしたりしている以外は特に変化の見られないようで、私はせつかくだからソレを振舞つてもらうことにした。
なあに、変な物を飲まされたら入れ知恵した奴を暴いて二度とこの様なことがないよう教育してやるだけだ。

配られて使用が自由とはいえ、無駄な知識で嗜好品を浪費させられる恨みの恐ろしさを思い知るといい。

状況を整理しよう。

私はホットチョコレートを振舞つてもらうために少尉を家へと上げた。
思えばこの時に気が付くべきだった。

私の思うホットチョコレートを作る材料など、わざわざ携帯したりはしない。
つまり、この時点で予想と違ったのだ。

ところが、

「えへへ。少佐殿の家は久しぶりです」

という満面の笑みの横顔に満足してしまい、何も違和感を覚えなかつた。
さらに言えばそのあと行動も変だつた。

いきなり置いてある彼女の歯ブラシで歯を磨き始めたのだ。

いや、歯磨きは大事だ。しかし、わざわざチョコを食べる前にすることか？

歯磨きの後を思い出してほしい。妙な口の中の状況になり、うまく味を感じられない
状態ではないか？

それなのにわざわざ歯磨きをした。……もちろん、私もつられました。

横に並んで歯磨きというのも、しばらくぶりだつたからな。

そして——そしてだ。

私の寝室へと行くと、慣れた手つきで私が枕元に隠しておいたチョコレートを探し当て、ひとかけら口に含んでしまつたではないか。

つまりは少尉がチョコにありつきたいがために吹いた嘘だつたということか？
だとするならば二度とこの様なことがないようには折檻を——んむつ！?
なんだ？ 柔らかなものが唇に押し当てられて……。

せ、接吻？ つまりキス？ な、なぜ？

突如として当てられた柔らかに動搖し、身動きが取れないでいると、私の唇を割つて入ろうとするヴィーシャの舌が。

その動きによつて、徐々に舌の侵入を許していき……。

にゆるん、と。割つてしまえばあつさりと私の喉内奥へと侵入する彼女の舌——甘い？

甘さを感じ、目を見開くと、彼女から熱い塊が押し込まれてきた。

ついさつき口に入つたチョコレート。

やや溶け始め、形が崩れだしたそれは、私とヴィーシャの舌にサンドされて柔らかく形を変え。

上に、下に。右に、左に。

チヨコによつて隔たれた奥、ヴィーシャの舌へたどり着こうと舌を動かすと。
まるでこちらの舌の動きでも見えているかのように彼女の舌もまた、私の舌から逃げ
るようになくなつて。

一進一退の攻防が続く中、壁であつたチヨコは、私たちの舌によつて削られ、体温で
溶けて小さくなつて。

もはや障害にならなくなつたころ、ようやく私はヴィーシャの舌を捉えた。
逃がさないように舌を巻きつかせ、引っ込められないように吸い付いて。

チヨコ交じりの唾液が口から洩れようと、それは私がこの舌を離す理由にはならな
い。

最初の目的であるホットチヨコレートなぞどこへやら。

私は、チヨコの熱にあてられたか。それともヴィーシャの熱にあてられたか。
気が付けば貪るように、彼女の舌を吸い続けていた。

しばらくの時間がたち、ヴィーシャが私の背中をさする。

おつと、いかんいかん。これは苦しくて限界という彼女の意思表示だ。

ついついこうなると時間を忘れてキスを貪つてしまふ。

全く、心地よすぎるというのも考え方だ。離したくないし離れたくなくなつてしま

う。

「しょ、少佐どのお……」

口を離すと目を潤ませ、頬を紅潮させたヴィーシャが弱弱しい声で私の事を呼んでくる。

やめろ。そんな顔をするな。足りなくなつてしまふではないか。

「ま、まだチョコレート……ありますよ？」

そう言つて吐息を吐きながら、力が入らないのか震える手で板チョコを割り、今度は含まずに口に咥えたヴィーシャは。

「お、おかわりどうぞ」

と私へと顔を近づけるのだった。

誕生日

「それで？ 今日は何の用だ？」

「覚えておられないのですか？」

「我が優秀な副官、ヴィーシャに連れられて来たのは彼女の家。

何か用事があると言つっていたのだが、これでは別に普段と変わりはしない。

だからこそ問い合わせたのだが、向こうから返ってきたのも問い合わせであり、質問に質問で返すのは感心しないとムツとして居たら、不安そうな顔で私の表情をのぞき込んでいた。

「一体何を覚えていないと？ 何か約束をしたか？ や、他の連中ならまだしもヴィーシャとの約束を忘れるとはあり得ない。

だとすると記念日？ 初めて彼女の家に呼ばれた日？ —— 違う。

初お泊り？ ……これも否だ。

ヴィーシャの誕生日……は冬であるし——うん？ 誕生日？

「そうか！」

「私の誕生日か！」

「そうですよ。……やっぱり忘れられていたのですね」

「いや、しかし待て。私は自分の誕生日を貴官に伝えた覚えはないのだが……」「ダキアとの戦いの前に言つておられたではありませんか」

「あー……そういえばそんなことを言つた気もする」

ようやくたどり着けた答えに納得し、けれども湧き出た疑問は、即座にヴィーシャの口から回答が滑り出てきて。

自分自身ですら発言していたことを覚えていなかつたというのに、全く……うちの副官は優秀過ぎるな。

「少佐殿の誕生日という事で、腕によりをかけてごちそうを作つたのでご堪能ください」「ありがとうございます。最高のプレゼントだよ」

家に着き、ドアを開ければすぐさまいい匂いが鼻腔をくすぐつてくる。

どうやら下ごしらえだけを済ませているらしいが、それでこの匂いとは……完成するのが待ち遠しいな。

「では少佐殿はテーブルでお待ちください。すぐに仕上げてきちゃいますので」

そう言つてエプロンを付けたヴィーシャは、キツチンの方へと歩いていく。

思えばこうしてエプロン姿のヴィーシャを見るのは久しいな。

最近は忙しくて外食ばかりだったからか。こうして見ると立派なお嫁さんじやあな

いか。

「まずはコーヒーです。炒り方から練習したので満足していただけるかと」

私の事をよく理解している出来た副官は、まず私が望んでやまないものを出してくれた。

周囲に立ち込める香ばしい香り。やや茶色がかつた黒い液体は、覗き込む私の姿を反射して引き込むようで。

カップを近づけ息を吸い込めば、周囲を漂う何倍もの香りに思わず酔いしれてしまいそうだ。

目で見て、鼻で味わった後、残るはいよいよ味のみ。

口に付け、ゆっくりと傾けて口内へとコーヒーを注ぎ込むと……。

やや強めの酸味と香ばしさ。後から感じる苦みの奥底に、ほんのりとした甘みが顔を出し、思わず頬が緩んでしまう。

心配そうにこちらを見てくるが安心したまえ。貴官の淹れたコーヒーが不味いはずがない。

感想を言うよりも、まずは余韻に浸りたい。

視線を上げ、上体を逸らし。ゆっくりゆっくり鼻から息を抜いて。まだ口内に残る芳醇な香りを、最後まで楽しんだ後、

「流石はヴィーシャだ。最高の味だよ」

そう伝えれば、不安そうな泣き顔だつたヴィーシャの表情に陽が差して。満開の花のごとく輝く笑顔を見せ、料理の方へと取り掛かりに行つた。

……不覚にもドキッとした。見慣れたはずの笑顔がまぶしくて。

ずっとそばで見ていたい、と。独り占めにしていたいと本気で思つてしまつた。そんな気持ちを抑えるため、私は手に持つたカツプの中身を、再度口の中へと流すのだった。

*

「ふう。久しぶりにこんなに食べたな」

「ご満足いただけたようで何よりです」

テーブルに並べられた数々の料理。それら全てを平らげて、ヴィーシャへと感謝の言葉を。

「貴官のおかげで今年の誕生日はとてもいい一日となつた。感謝するよ」

「いえいえ、このような事しか出来ませんでしたが、満足していただけて本当に良かったです」

だが、少しだけ物足りない。……そう物足りないのだ。

コーヒーを堪能し、手料理に舌鼓を打ち。

腹を満たされたはしたが、物足りない。

……そうだな。

「時にヴィーアシャ」

「はい、何でしようか?」

「私は今日誕生日で、それを祝うために料理を振舞つてくれた、そうだな?」

「はい。その通りであります……それが何か?」

「確かに料理は美味しかったし満足したが、そうだな……プレゼントが足りない」

「プレゼント……で、では、今から買ってきて——」

「いや、いい。満腹になつて睡魔が来た」

「そ、そうですか……」

「こちらの前置きで十分か。勘が良ければもしかしたら気が付くかもしれないが、目の前のヴィーアシャは困り顔でオロオロするばかり。

どうやら、私の意図が汲み取れていないうだ。

「しかし季節は秋口とはいえ、今日は妙に冷える。そこで……一緒に寝てくれたりなどしないか?」

「へ? ……も、もちろんです!! 少佐殿が寒さで風邪などひかないよう、私が責任を持つて温めさせていただきます!!」

「では早速。……ああしかし、眠いせいで足元がおぼつかないなあ」「つ!? わ、私が運ばせていただきます!!」

そう言つて座つた私を抱きかかえてくれるヴィーシャ。
ちようど口元に彼女の耳が来ているのを見て、少しばかり意地悪をしたくなつてしまつた。

「今日はありがとう、ヴィーシャ。……はむ」

「ひやわ!? しょ、少佐殿……何を!？」

ただ耳を甘噛みしただけだというのに、私を落としそうになるほどに驚かれ。
耳まで真っ赤にしながら抗議してくる彼女は何とも可愛らしい。

「そんな調子ではベッドでは持たんぞ? 何せ普段よりも早い就寝だ。夜は長いぞ?」

「そ、それは……／＼／＼」

ベッドでは朝までイチャイチャした。

タニヤヴィシヤ短編集

せつかく二人で過ごしていたというのに、少佐殿は上層部に呼び出されて行つてしまわれた。

それがわがままだと自覚はあるし、上からの呼び出しを無視できないのも理解はしている。

けれども、納得は……いつまでも出来そうにない。

「もう少し一緒に居たかったな」

自然に口を出た、素直な気持ち。

少佐殿は、

「すぐ戻る」

と言つておられたが、それは気休め以外の何物でもないと、察している。

ふと、少佐殿が使つているクツシヨンが目にはいった。

椅子に乗せ、ほんの少しだけ座高を高くしてくれるそのクツシヨンは、椅子に座つた少佐殿の高さを丁度良くしてくれる。

……私に抱き付く、私が抱き締める、丁度いい高さに。

「少佐殿……」

無意識に手が伸びる。

クツショーンを引き寄せ……抱き抱え。

胸に広がるくすぐつたいような、甘いような、少佐の匂いをついつい嗅いでしまう。

「少佐殿……」

漏れるため息は熱く、粘く。

彼女の私物に自分の匂いを付けようと、額を擦り付けていると……。

「貴官は何をしているのだ?」

「ひやいっ!?

宣言通りに、すぐに戻ってきたタニヤが扉のところからジト目で見られていた。

「こ、これは……その……」

「全く、すぐに戻ると言ったのに、我慢出来なかつたのか?」

怒られる。そう思つたヴィーシヤだが、タニヤは彼女の前まで歩き、そこから先の言葉は紡がない。

まるで、何かを待つているように。

「どうした？　　そのクツシヨンで満足かね？　　本体が目の前に居るのだぞ？」

抱き締めてくれないのか？

そう続いたターニヤの言葉に、ヴィーシャは戸惑いながら。

「失礼します！」

そう言つて、小さな体を抱き締めた。

華奢で、背が低くて。

それでいて、大きな存在。

誇りである上司を抱き締め、そんな上司に頭を撫でられながら。

ヴィーシャは、幸せそうに頬を緩めるのだつた。

※

「う……寒……」

「い。」
目を覚まして……というよりは、それによつて目を覚まされたという方が正し

それくらいに、今朝は冷え込んでいた。

それでも、私の隣で寝ておられる小さくも大きい存在は静かに胸を上下させて

おられて。

私が感じた寒気とは、どうやら無縁のご様子。

本来は二人で寝ることを意図していないシングルベッドだけに、布団もギリギリ……とは言えず、私の半身は外の空気に晒されている。

けれど、その代わりに少佐殿は前述の通りに寒さは感じておられない。ならば、私が寒い思いをしている価値があるというものだ。

好きな人の安眠の為ならば、少し寒いくらい安いもの。

そう割りきり、首だけをもたげて少佐殿の寝顔を覗き見る。

私だけにしか許されていない、無防備な可愛らしい寝顔を拝む権利。

それは、何物にも替えがたい。

ふと、ここまでぐつすり眠つておられるなら、と、魔が差した。

いや、魅力的な唇に吸い寄せられた。

フニユ。と、固さなど微塵も感じられず、柔らかさのみの質感が私の唇から伝わってきて。

直後、

「寝込みを襲うとは感心せんな」

鼻を摘ままれた。

「ひよつ!? ひようさどの!?」

「もぞもぞと気配がすると思えば、目の前から目を瞑つた貴官が迫つてくるではないか。避けるに避けられず受け入れたが、次はない」

そう言われ、ようやく私の鼻が解放された。

「も、申し訳ありません!! 魅力的な唇を見ていたらつい!」

「つい! ではない。……全く。次からは同意を求める。私が貴官を拒む筈がないだろうに……」

最後の方は小さくなり聞き取れなかつたが、同意さえ取れればキスは許されるらしい。

「全く……最初は手を繋ぐくらいから……」

そう言つて少佐殿が握られた手は、今まで外の空気に晒されていた方で。

「冷たつ!? なぜこんなに冷えているのだ!?」

非常に驚かれてしまつた。

「そ、それは……」

言い淀むと、どうやら理解されたようで。

「はあ……全く。出来のいい部下であることは認めるがこの場合の正解はこうだろう?」

そう言つて、私に抱き付かれる少佐殿。

少佐殿の髪から漂う匂いや、抱き締められた胸から伝わる鼓動が私の理性を溶かす。

横並びから抱き合う格好になり、生まれた余裕は二人の体を布団で覆い隠せるようになり。

抱き付いたまま、少佐殿は私の体ごと四分の一回転ほど回り。

「ふふ、これで私の好き放題だな」

私の体に覆い被さる体勢になり、不適な笑みを浮かべられ……。

「折角の休みだ。楽しませろよヴィーシャ」

と、先ほど寝ているときに私がした行為への仕返しをたつぱりと時間をかけて行われた。

私がした行為より、一步先へ進んだ行為を。